

会社を、自分を支えてくれる お客さまや社員たちの幸福のために

土木工事業を中心に成長し、現在は測量・設計・調査の分野にも進出。経済不況を映して工事が減少傾向にあるなか、県内トップレベルの実績を誇る宇佐美工業の躍進の秘訣を聞いた。

設立から約20年で 地場中堅企業へ成長

現在、熊本県を中心に九州地方、さらには本州での工事も手掛ける株式会社宇佐美工業。土木事業部と建設コンサルタント事業部の2事業部からなり、前者では、一般土木工事全般や舗装工事、解体工事のほか、地盤調査・地盤改良にも対応。また、企画設計から設置工事、運用までトータルにサービスを提供している太陽光発電施工なども手がけている。後者においては、測量、設計、調査に対応するなど、幅広い事業領域によって、設立から20年あまりで、地場中堅企業としての実績と信頼を築いている。バブル経済崩壊後、建設業を取り巻く環境が悪化していく中でも、着実に成長してきた同社。しかし、そのスタートは決して順調とはいえなかった。「自分の不甲斐なさ」から多額の



株式会社宇佐美工業
代表取締役社長
宇佐美和男氏

借金を背負った宇佐美和男氏だった二人での船出だったという。「19歳から3年間、土木工事会社で働いた後、エステサロンや化粧品販売の会社を立ち上げましたが、失敗。知識も経験もなく、考え方も甘かったんです」。しかし、お世話になった人たちに迷惑はかけまいと「借金を必ず返済する」決意を固めて、土木工事の世界へ戻った。「365日、働くために頭を下げてまわり、いただいた仕事には全力を注ぐ。自分にできるのは、それだけでしたから」汗を流すことを惜しまずに働く宇佐美氏の姿を見て、周囲の人たちは次第に彼を信頼し、仕事を紹介してくれるようになっていった。そして、仕事が増え



SH200-6に導入した3Dマシンコントロールシステム。センサーによる位置情報で作業の自動化、効率化をはかる。丁張りや危険をとまぬ補助作業も不要に。熊本県山江村での太陽光発電所施工現場にて。

人間性を磨いて、いい男、いい女になれ！

るに従って、社員も一人、また一人と加わっていくことになる。「借金は無事に返済できましたが、今度は社員とその家族を守るため、ますます仕事に打ち込むように。とにかく、お客さまをはじめ、自分を支えてくれる人たちへの感謝の気持ちを忘れず、誠実に仕事に向き合うことを大切にしてきました」

宇佐美氏のこういった思いは社是『敬天愛人——天を敬い人を愛する』という言葉に表れており、また、社員教育にも反映されている。

現場で新人がぼんやり立っていると、「走れ！」という宇佐美氏の大きな声が響き渡る。「技術も経験も不足している新人は、先輩が仕事をしやすい環境を整えるのが仕事です。それなのに、一生懸命仕事をしている先輩の横でぼんやりするなど、何事だ！という事です」

きつく叱るのは、本人の将来を思っていることでもある。「汗を流して一生懸命働いてい

れば、周りの職人さんや現場監督さんなどから認めてもらえます。これが、将来の財産になるんです。人は、誰かに支えられて生きているのだから、周りに大勢の人が集まってくるようないい男、いい女にならなさいと、社員によく話しています。それ

には、技術や経験だけでなく、人間性も磨いていかなければならないと思うのです」

社員の内面育成に力を入れるだけでなく、新技術を積極的に導入し、将来を見据えた技術力の向上にも取り組んでいる。環境に配慮した地盤改良工事『HVSPEED工法』や、UAV（無人航空機）、地上レーザースキャナで撮影した画像による3次元モデル作成サービスをいち早く導入。2016年2月からは施工にICT（情報通信技術）を活用する方法を探るため、産学連携の勉強会『地域で実践するi-Constructionへまよう』を設置し、ドローンや自動制御建設機械などの活用法について



施工実績のひとつ、人吉5くまモン太陽光発電所。（熊本県人吉市）



UAVによる空撮で得た3D空間データをもとに3次元モデルを生成。測量のほか、災害時の被害状況確認や防災対策、景観評価など幅広い分野での活用が可能。



2016年夏、本社の倉庫前で。

宇佐美工業と住友建機

「住友建機さんとの付き合いは、私が借金返済のために必死に働いていた頃からですので、もう20年近くになります。（バケット容量）0.25の中古バックホーを『割賦でいいよ』と安く売ってくれたのです。あれは、本当にありがたかった」

住友建機の製品を扱ったときの操作性や機械のバランスの良さが気に入り、長く取引が続くことになる。「でも、それだけではありませんよ。今時、流行らないかもしれませんが、住友建機さんの担当者は皆、人として信頼できるのです。忙しい中でも修理に迅速に対応してくれたり、こちらの状況を考えて動いてくれます。そんな意気なところが気に入っています」

情報化施工を取り入れる際も、まず頭に浮かんだのは「住友建機のショベル」だった。2016年4月の熊本地震前後、3Dマシンコントロールガイダンスを搭載したSH200-6を2台導入している。

「生産性向上のためでもあります。情報化施工を導入することで、若手が少しでも早く現場で活躍できる機会が増えればという思いもあります」

実際の現場での検証を始めている。さらに、九州で最も早く3Dマシンコントロールガイダンスを搭載したショベルカーを2台導入した。「私自身は古い人間で機械やコンピュータには疎いのですが、今後を見据えれば、建設業界もICTによる情報化施工が当たり前の時代になります。将来、会社がさらに成長するためにも、また、そこで働く社員たちのためにも、少しでも早く技術を導入して知見を積むことが重要だと思っております。こういったことのすべてが、結果的に社員の幸福につながれば嬉しいですね」宇佐美氏は、優しい目をしながら、そう結んだ。